

氏名	みけだ まさみ 三ヶ田暢美
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	第8号
学位授与年月日	平成26年5月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者 看護学研究科看護学専攻
学位論文名	認知症をもつ人の特性を活かした構造化による BPSD 軽減の有効性 - TEACCH プログラムにおける構造化を応用して - The possibility of BPSD reduction by a therapeutic visual structured approach for persons with dementia: Application of structured teaching in TEACCH program
指導教員	吉村匠平准教授 李 笑雨 元教授
論文審査委員	主査：影山 隆之教授 副主査：佐伯 圭一郎教授 ・ 石田 佳代子准教授

論文内容の要旨

認知症の人が増加する中、住み慣れた地域で少しでも長く暮らすためのひとつの方法として、自閉症の人が自立した生活を送るために有効な TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildren)プログラムの構造化を活用して、BPSD(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)：認知症の行動と心理症状)が低減するか検討した。構造化とは、物理的な環境(空間)の意味や作業手順、時間や概念などの眼に見えないものに対して、各個人の特性にあわせて分かりやすく示すことである。本研究では3つの調査を行った。

調査1では、老年精神医学会が監訳した「BPSD 痴呆の行動と心理症状」に記載されている症状をもとに質問紙を作成し、BPSD と要介護度の関係を検討した。結果、要支援の段階で存在していた BPSD は要介護1や2で一度低下して、介護度が上がることにともなって上昇するように推移している傾向があった。このことから、要介護度の低い段階から BPSD を低減できるような関わりが必要であることが確認された。

調査2では、構造化を認知症の人に活用できるか検討するために、PARS(Pervasive Developmental Disorders Autism Society Japan Rating Scale：広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度)を用いた質問紙調査を行い、認知症と自閉症の人に、どのような行動が共通して観察されるか整理した。結果、PARSの総合得点で自閉症などの発達障害が強く示唆されるカットオフポイントを超える人が約60%いた。また、PARSの質問項目について認知症と広汎性発達障害の人の症状の出現頻度を比較すると、有意差がみられない項目が33項目中15項目あった。有意差がみられない項目は、遂行機能障害、言語的なコミュニケーションの理解と表出の困難、注意の散漫などだった。遂行機能障害によって、できなくなったことをできるようにするために、構造化は活用できる。また、言語的なコミュニケーションの困難に対しても、構造化によって視覚的に情報を伝えることで理解は促される。このことから、構造化を活用することで BPSD が低減する可能性があることが示唆された。

調査3では、認知症対応型グループホームに入所している4名を対象として、構造化による日常生活への介入を行い、構造化によって BPSD が低減する可能性を検討した。生活状況のアセスメントと構造化のためのアセスメントを実施し、構造化による介入課題を選定した。結果、全ての事例で BPSD の得点の減少がみられた。構造化によって、できなくなった活動ができるようになることで、結果として BPSD の低減を可能とすることから、認知症をもつ人のケアのひとつとして、構造化は有効であることが示唆された。

本研究結果から、介護度の低い要支援の時にも BPSD がみられていることから、認知症の早期から介入することがより効果的であると考えられる。構造化は、できなくなった活動をできるようにするためのひとつの方略であり、できなくなった活動ができるようになることで、社会参加が促される。介護度の低い段階では、保たれている機能が多くあり、構造化によってできることが増える可能性も高いと考えられる。構造化による早期からの支援をすることで、本人だけでなく家族にとっての負担も軽減でき、結果として少しでも長く住み慣れた地域で暮らすことにつながると考える。

Abstract

Purpose : The view of this study is to verify the effectiveness how therapeutic visual structure reduce BPSD of Persons with Dementia. The reduction of BPSD lead a happy life, and long life in the town where lived for many. The therapeutic visual structure that TEACCH program propose means environmental organization considered by their individual characteristics. It is useful for the person with autism. This study conducted three survey.

Survey 1 : First, created a questionnaire based on “Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia (Japanese version)” translated by Japanese Psychogeriatric Society. Next, examined the relationship between the long-term care level and BPSD. The result explains that BPSD is found in the level of "Require support", and BPSD change by the level, decrease in "Care level 1 or 2", and increase the level goes higher. Therefore, it is necessary to lower BPSD at the early stage.

Survey 2 : Focus on the common behavior which the person with dementia and autism both show, compared them by using the questionnaire of PARS. More than 60% of people scored above the cut-off point. Besides, in 15 out of 33 items there were no significant difference between dementia and autism. The items were, executive function impairment, distraction and difficulty of verbal-communication comprehension and output, and so on. The results indicate the person with dementia have the similar trait of autism and suggest that “Structure” have a possibility to improve BPSD.

Survey 3: Examined the possibility that the intervention by using “Structure” in daily life reduce BPSD. The subjects were four clients in the group home for dementia. Through observation of daily life and the assessment from the view point of “Structure”, interventional tasks were selected. After the intervention, all subjects’ BPSD scores reduced. “Structure” is considered to be one of the effective care for person with dementia, because it is able to reduce BPSD.

Conclusion: Therapeutic visual structure makes the “impossible” activity influenced by dementia “possible”. Moreover, it actively promotes participating in society. Therefore therapeutic visual structure is considered to be effective for the persons with dementia.

論文審査の結果の要旨

本論文は、認知症と広汎性発達障害における認知機能障害の類似点に着目し、広汎性発達障害をもつ人を支援する上で有用な構造化という概念を用いた支援プログラム TEACCH を認知症ケアに適用するため、三つの基礎的検討を行った成果をまとめたものである。第一の研究では、認知症者の要介護度と、生活困難につながりやすい周辺症状（BPSD）との関連を検討し、要介護度が低い段階でも BPSD による困難が大きい実態を明らかにした。第二の研究では、広汎性発達障害における遂行機能障害の評価ツールである PARS を認知症者に適用し、二つの障害に共通点が多いことを確認した。第三の研究では、上記の共通点を踏まえ、認知症事例に対して TEACCH プログラムに基づく介入支援を行い、一定の効果を確認した。この支援は、認知症人口が急激に増加する中で、認知症により「できないとされていること」をできるようにすることであり、当事者の QOL 向上と援助者特に家族の負担軽減に資することが期待される。そのための基本的道筋を確立した本研究は、看護学の博士論文としてふさわしいものと評価できる。